第178話　本町域の私塾・寺子屋⑦　中山町歴史散策

晋道渭川塾

中山町には、第177話のはじめに書いたように医者を営みながら漢学などの塾を開いた人が多く、晋道渭川もその1人です。町内の元町・旧国道の十字路から南に入ってすぐの東側に、大きな屋敷があります。ここは以前から渭川様と呼ばれていました。医者であり、漢学、書道の塾を開いた渭川氏の住んでいた場所です。師（渭川氏）については建立された「晋道先生碑」を読めば、師の人となりや活躍された様子を学びとることができます。この碑は、台座を含め高さ2メートルもあり、町内に残る碑の中で立派なものの1つです。

師は越後（新潟県）の新崎に生まれ、14歳で江戸に出て佐藤宗春と太田三英に医術を学びました。縁あって先代の渭川を訪ね、医術を研究し、頼まれて晋道家を継ぎ、先代の没後、渭川を襲名しました。

碑文は右面にあり、背面に筆弟中、慶応元年（1865年）十一月　世話　柏倉文蔵、高橋藤吉（のち岡村と改姓）、斉藤太蔵（西町、のち名主）、高橋甚内、石沢太惣治など門人の代表者の名前があります。いずれも後世で長崎を背負って立った人物ばかりでした。左面には辞世の歌が刻まれています。

夢の世を
ゆめ見て暮し冬の日も
六十四年　我ゆめの世や

師は元治元年（1864年）に亡くなりました。

※引用　中山町史　中巻
第10章第2節　教育

晋道渭川顕彰碑

私たち地域おこし協力隊です！ No.46

いながき

こんにちは。地域おこし協力隊の稲垣です。

柏倉家では雪も溶けきり、各所で水たまりを作りながら敷地外の最上堰へと流れていきます。その様子はさながら「五月雨を集めてはやし最上川」の句のようでした。

最上川と言えば江戸時代は舟運がありましたが、最上川の水難は春に多かったと言われ、最上川と共に暮らした船頭たちの間には「寒水に落ちても春水に落ちるな」という口伝があったそうです。 寒い時期の川の水よりも、まだ思いの外冷たい春の川の水は用心しなければならないという意味です。

三嶋山のどこかにあるオニワタリサマ
（2021年秋撮影）

また、惣右衛門家の近くにはオニワタリサマと呼ばれた石の祠が残っており、舟運の安全を祈願するためのものと伝わり、毎年岡村の祭りが行われた4月3日にこのオニワタリサマへ赤飯や煮物を持ってお参りしたそうです。ただ九左衛門家など他の家はお参りには来なかったそうです。

時に災いをもたらしますが、生活には不可欠な水をめぐっては地域社会のあり方に関係していることもあります。そうしたわずかな変化は毎年の移り変わりの中で、わからなくなってしまった事柄もたくさんあります。 昨年度から行った聞き取り調査では、そんなお話も伺えました。現在記録として編集しており、次回は調査の裏話などをお伝えしたいと思います。

●協力隊への問い合わせ先●　伊藤 ☎662-2114（産業振興課）／ 稲垣 ☎662-2235（教育課）